

アンケート調査による夜間の明るさに対する住民意識の把握

住宅と工場の混在する自治会地区における防犯対策を目的とした住民主体の夜間照度改善活動の支援 その1

アンケート調査 よく利用する道路

暗いと感じる道路 防犯

1. はじめに

住環境に問題を抱える住民にとって、何らかの対策を講じようとしても、専門的な知識がなく、活動の土台がないなど自分たちの力でその実態を正確に把握し、改善することは容易ではない。本研究では、狭山市新狭山地区連合自治会を対象として夜間照度の改善計画立案及び防犯性の向上を目的とし、その現況を把握するために、住民を主体として懇談会やアンケート調査を行った。

2. 対象地区決定までの流れ

本研究では自治会・町会を対象範囲としている。その理由として、自治会は地域管理の主体であること、地域の範囲が明確であるため調査の範囲を把握しやすいこと、地域の住民間で組織化されているため全体への情報伝達が可能であることなどが挙げられる。選定は住民の主体性を尊重するために募集形式を採用し、応募のあった29の自治会・町会への現地調査及びヒアリング等を行い、それぞれについて研究室で十分な検討を行った結果、新狭山地区連合自治会を対象地区として決定した。

3. 対象地区の概要

新狭山地区連合自治会は、狭山市の北東部に位置しており、新狭山1丁目自治会、新狭山2丁目自治会、新狭山3丁目自治会で構成されている連合自治会である。加入世帯数は全世帯の約7割の1,870世帯(1丁目55世帯、2丁目1,313世帯、3丁目500世帯)となっている。図1に対象地区の全体図を示す。赤線で示したところが新狭山地区でよく利用されている商店街である。1丁目の大部分が工場(川越狭山工業団地)、2・3丁目の大部分が住宅(工場の寮も含む)で占めており、職住近接を理想に、西武新宿線新狭山駅を中心に商業施設や住宅地が形成されている地区である。夜間の明るさに不安を抱えており、2丁目に位置する商店街の街灯は、節電のために2つのうち1つの電球が取り外されている。また、夜間における裏道は暗いところが多く、そういった地点において、ひったくり、痴漢、不審者に追いかける事件が発生している。



図1 新狭山地区連合自治会の全体図

準会員 ○中澤 伸介*1

正会員 長谷部千春*2

正会員 クアック ティン*3

正会員 三浦 昌生*4

4. 第1回懇談会

2013年10月6日に新狭山公民館にて住民67名、市職員2名、筆者を含む学生7名、他3名の計79名が参加して第1回懇談会を行った。懇談会の周知については、ポスターを公民館や自治会掲示板に掲示した。第1回懇談会では、活動全体の趣旨を理解することで活動の疑問点を解消し、住民の結束を高めることを目的としている。夜間照度実測に関する意見交換の場では、「工場や商店街の時間の配慮をしてほしい」や「自治会内で暗く感じる道路への配慮をしてほしい」などの意見などが交され、積極的な懇談会が展開された。

5. 自治会住民対象の夜間の明るさに関するアンケート調査

5.1. アンケート調査の概要

夜間における明るさの現状に対する住民の意識を把握するため、同地区に加入している1,870世帯を対象にアンケート調査を行った。アンケート項目については、自治会長や役員との検討の結果、「夜間の道路の明るさ」「夜間における子どもの外出」「防犯に関する意識」「商店街の印象」の4項目で構成することとなった。アンケートは、2013年10月15日に新狭山地区センターにて住民9名、市職員1名、学生5名の計15名で1,870部の製本作業を行った後、翌10月16日より各班長より手渡して配布をし、10月31日に各班長が手渡して回収、新狭山地区センターにて回答されたアンケートを回収した。回収は831部、回収率は44.4%となった。

5.2. アンケート調査の結果

図2に「新狭山自治会内の夜の明るさについてどのように感じていますか」の回答結果を、図3に「暗いと感じている所を改善したいと思いませんか」の回答結果をそれぞれ示す。図中のNは回答数を表す。図2から「暗い」「やや暗い」と回答しているのが全体の47.8%で「明るい」「やや明るい」の回答を上回る結果となった。また、図3より83.7%の人が暗いと感じている所を改善したいと思うという結果になった。このことから、住民の約半数が暗いと感じており、約8割の人が改善したいと思っていることが明らかとなった。

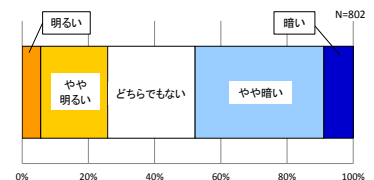


図2 「夜間の明るさについてどのように感じていますか」の回答結果

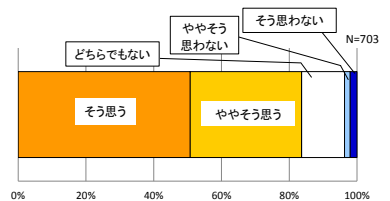


図3 「暗いと感じている所を改善したいと思いますか」の回答結果

図4に「何が原因で暗いと感じますか」の回答結果を示す。この設問は、図2に示した設問で「やや暗い」「暗い」と回答した人を対象とした。街灯の少なさや設置間隔を原因であると回答した人が多いという結果になった。設置間隔が広いということはその分街灯の設置数は少なくなるため、道路の距離に対して街灯の数に満足していないことが考えられる。

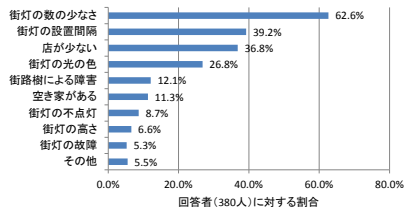


図4 「何が原因で暗いと思いますか」の回答結果

図5に、「夜道で泥棒やひったくりが発生したなどを聞いたことがありますか」の回答結果を示す。35.7%が「ある」と回答した。また、アンケート内に設けた自由記述に犯罪に関する意見が多かったことと合わせ、夜間における事件に対して不安を抱えていることが明らかとなった。

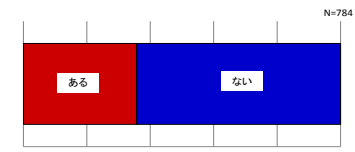


図5 「夜道で泥棒やひったくりが発生したなどを聞いたことがありますか」の回答結果

防犯意識の向上の手法の一つとして、地域安全マップがある。これは、埼玉県警が出している事件・事故発生マップを見ながら、実際に犯罪等が起りやすい地点に行きながら作成するものであり、狭山市が作成を推奨している。「地域安全マップを作成したことがありますか」という問いに対し、「ある」と回答した人はわずか0.8%であった。さらに、図6に示すように、「地域安全マップを作成したいと思いますか」に、39.5%の人が「思う」「やや思う」と回答したことから、住民の防犯に対する意識を向上させるための手法として地域安全マップを作成することは有効であると考えられる。

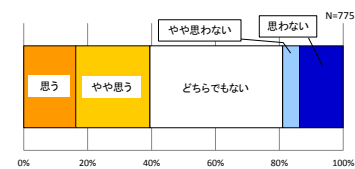


図6 「地域安全マップを作成したいと思いますか」の回答結果

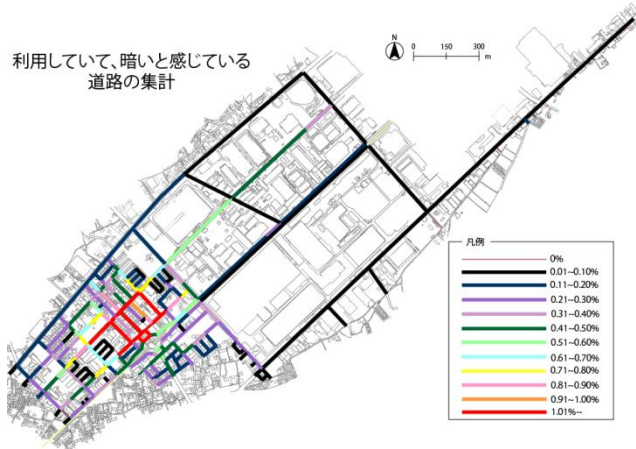


図7 アンケートによる住民の回答結果を集計した地図

図7に、「普段利用している道路を記入してください」と「全体で特に暗いと感じている場所を記入してください」を合わせた回答結果を示す。算出方法は、同じ道路において全回答数に対するその道路の利用回答数の割合と、暗いと感じる道路の回答数の割合の平均をとって算出した。商店街の周辺の道路の利用率が高く、暗いと感じていることが分かる。しかし、回答者は2丁目に住んでいる人が多いため、2丁目にある道路の回答数の割合が高くなってしまふ。そこで、図7と同様に1丁目と3丁目でそれぞれ集計した結果を図8、9に示す。

【1丁目】
利用していて、暗いと感じている道路の集計

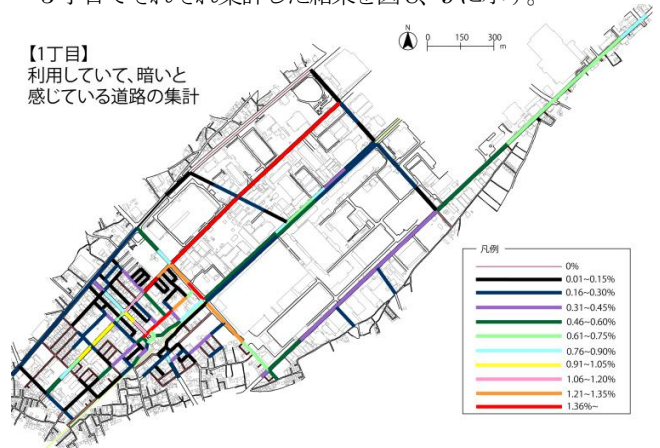


図8 1丁目に住んでいるまたは勤務している人の回答結果を集計した地図

【3丁目】
利用していて、暗いと感じている道路の集計

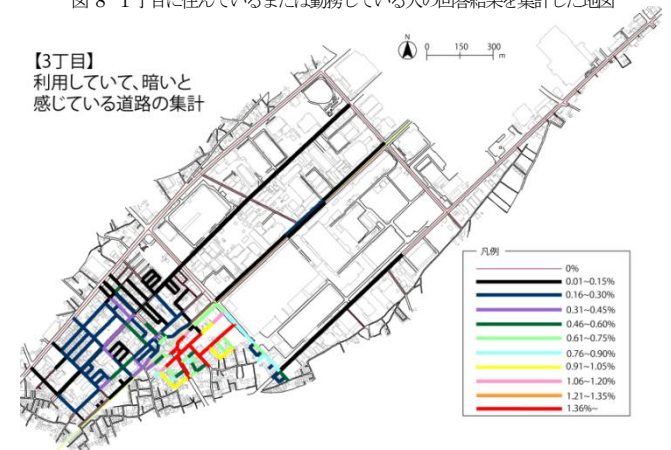


図9 3丁目に住んでいる人の回答結果を集計した地図

自分の住んでいる地域の道路を多く利用し、かつ暗いと感じていることが分かる。図7と合わせて見ると各丁目で割合が高く出ている道路と、全体で比較的高く出ている道路の場所はほぼ一致する。回答率が高い道路は夜間の犯罪の起りやすさにも影響してくるため、優先的に改善すべき点であると考えられる。

6. まとめ

懇談会やアンケート調査から、夜間照度の他、新たな課題の発見や地区内の現況の把握、住民の意識・関心の向上ができたのではないかと考えられる。約半数が暗いと感じ、夜間照度と犯罪に対し不安を感じている。夜間照度実測においては同地区全体の道路の全ての現況を把握するために、全道路において水平面照度と街灯直下照度の実測を行う。ここから得られる客観的なデータを用いて改善計画の立案を行うために、これらの結果を住民の主観的な資料として活用する。

本研究は、科学研究費助成金(基盤研究(C))「住民との協働による住環境づくり活動がもたらす効果の総合的検証と展開」(研究代表者:三浦昌生)によるものである。

*1 芝浦工業大学学部生
*2 ダイダシ (当時芝浦工業大学学部生)
*3 芝浦工業大学大学院修士課程
*4 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科 教授・工博

Bachelor Student, Shibaura Institute of Technology
DAI-DAN
Graduate Student, Shibaura Institute of Technology.
Prof., Dept. of Architecture and Environment Systems, Shibaura Institute of Technology, Dr.Eng.